

# 医療 新世紀

専門医以外には難しいとされる漢方独特の診断法を、ITを活用して広く普及させられないか。漢方の診断支援システムの開発が、厚生労働省などの研究費で2008年から進んでいる。

現在、健康保険で使える漢方薬は約150種。業界団体の調査によると、日常診療で漢方薬を使用している医師(眼科、美容外科など)一部の診療科を除くは約9割に上る。10年末時点の医師数(約29万5千人)に単純に当てはめると、全国で26万人以上が漢方薬を処方している計算だ。

## 9割が処方

## 独特の問診、もっと身近に

だが、日本東洋医学会が認定した漢方専門医は2千人余り。「大半は専門的な知識がないまま、西洋医学の薬の代用としてわずかな漢方薬を使っているのが実態」と研究代表の渡辺賢治慶応大教授(内

科と漢方が専門)は話す。漢方は、患者の症状だけでなく体質にも着目し、「証」と呼ばれるその人のタイプに合わせた薬を選ぶ。このため、西洋医学的な病名は同じであっても、漢方では患者によ

って用いる薬が異なるという特徴がある。「患者一人一人に最適な『個別化医療』を」目指す点、検査結果よりも患者の訴えを重視する点で、漢方はより患者目線に立った医療と言えるのではない

か」と渡辺さん。だが、証の見立ては医師の専門知識や経験に基づいており、分かりやすい客観的基準がない。「これではせっかく漢方薬を使っても、良さを十分に引き出せない」と、一般医師向けの診断支

援システムの開発に取り組むことになったという。その第1段階として、患者が自分の自覚症状や体質を、タブレット端末などのタッチパネル式画面で入力する「問診システム」を

「暑がり」など数百項目の質問や選択肢への答えを入力。漢方専門医による診断結果と照合することで、適切な診断につながる問診項目を絞り込んでいった。データの集積は10年にまず慶応大でスタ

# 漢方診断でIT活用

患者は画面に表示される「イライラする」

患者が自覚症状などを

入力するタブレット端末の画面

(渡辺賢治氏提供、液晶画面は、はめ込み合成)

10.その後、富山大、千葉大など計7施設に

渡辺さんらが目指す背景には、別の事情もある。日常の診療に加え、死因などの統計にも使われる世界保健機関(WHO)の国際疾病分類が2年後(15年)に改定され、日本の漢

製作用した。患者は画面に表示される「イライラする」

患者が自覚症状などを入力するタブレット端末の画面

(渡辺賢治氏提供、液晶画面は、はめ込み合成)

10.その後、富山大、千葉大など計7施設に

渡辺さんらが目指す背景には、別の事情もある。日常の診療に加え、死因などの統計にも使われる世界保健機関(WHO)の国際疾病分類が2年後(15年)に改定され、日本の漢

別の事情  
漢方診断の標準化を渡辺さんらが目指す背景には、別の事情もある。日常の診療に加え、死因などの統計にも使われる世界保健機関(WHO)の国際疾病分類が2年後(15年)に改定され、日本の漢

## 世界に積極発信へ

方を含む東アジアの伝統医学の診断項目が、西洋医学以外で初めて取り入れられる予定になっていることだ。漢方は、ルーツは中国だが日本で独自に発展した。「その結果、中国や韓国の伝統医学と違い、西洋医学を学んだ医師が漢方を用いる」という質の高い医療が行われている上、日本製の漢方薬は品質が安定し安全性も高いという特長があり、世界に積極的に発信できる可能性がある」と渡辺さんは強調する。将来の国際化をにらみ、漢方をどう活用していくのか。国の政策的な検討も求められると渡辺さんは指摘している。(共同)